

第3節 北門跡の調査

(1) 発見までの経緯

平成8年に西門跡が発見されたことにより、城門跡発見のいくつかの手掛かりが得られるようになった。すでに東門跡は昭和53年の調査時に墨線が切断されていること、切断部に墨線と平行して2段の石積みが見られること、切断部が6mほどの広がりをもつことなどから、ここが城門跡としての蓋然性が強い、として「第1城門跡」として報告されている。その後、平成5年にそこで偶然に門礎を発見し、翌年と翌々年の発掘調査で掘立柱城門であることが判明した。名称はその後の他の城門跡の発見により東門跡と改称した。

この東門跡の調査成果と西門跡の発見時の状況から、あらたに候補地が浮かび上がり、西門跡の調査と併行して確認調査を行った結果、城門跡であることを確定できた。これが南門跡である。ついで翌年の南門跡の調査時にほぼ同様の状況で確認したのが北門跡である。

南門跡は西門跡と同工同大の大規模な城門であり、また北門跡は門道部に排水溝をもち、門柱が角柱と丸柱の組み合わせという特異な城門跡であることも判明した。

かくして、鬼ノ城には正面側に西・南・東門跡の3門と背面側に北門跡の、計四か所に城門が配されていることがあきらかになった。



第35図版 確認調査時の門礎
(北から)



第36図版 同排水溝(東から)



第37図版 調査前の北門跡(南から)



第59図 北門跡位置図
(S=1/8000)

(2) 立地

鬼城山は吉備高原の最南縁に位置する半独立状の山塊である。北辺と東辺は血吸川で画され、南辺は砂川で画される。西辺は犬墓山との間に長く谷が広がっている。山塊の主軸は北東から南西に偏っており、南北に長くのびた山塊である。最高所は主軸のほぼ中央に位置する鬼城山で、標高は396.2mである(一般的には切上げて400mとしている)。山塊の主軸稜線ラインは、北は血吸川に向かって急激に下降するが、南は緩やかに下っている。一方、これに直交する東西ラインは、西は主軸の稜線から谷部へは短くやや急に下るが、東へは標高200mあたりまでは急峻なもの、以東は緩やかに下っている。

城跡は山塊主軸部の中央部から北部に占地し、城壘は正面側では標高300m以上の山腹を縫って走るが、背面側は標高350m以上のラインを走っている。したがって背面側が高く、正面側が低いことになる。背面側の城壘が構築されている斜面下には、血吸川上流部分からこの山塊最高所の鬼城山の西直下にある角楼跡のあたりまで一条の細い谷が入り込んでおり、これに向かって主軸の西斜面には幾筋もの小さな谷が刻まれている。

北門跡は、こうした小さな谷部の谷頭に構築されており、山塊主軸ラインにほとんど接するような位置にあたる。このため、城内は第4水門に下る城内最大の谷が入り込んでおり、その谷頭がほとんど城門の間近かにまで迫っているところである。

(3) 城壘

城壘の記述にあたって右側、左側と呼称するが、これは城内側からみでの右、左である。



第38図版 調査中の城内(南から)

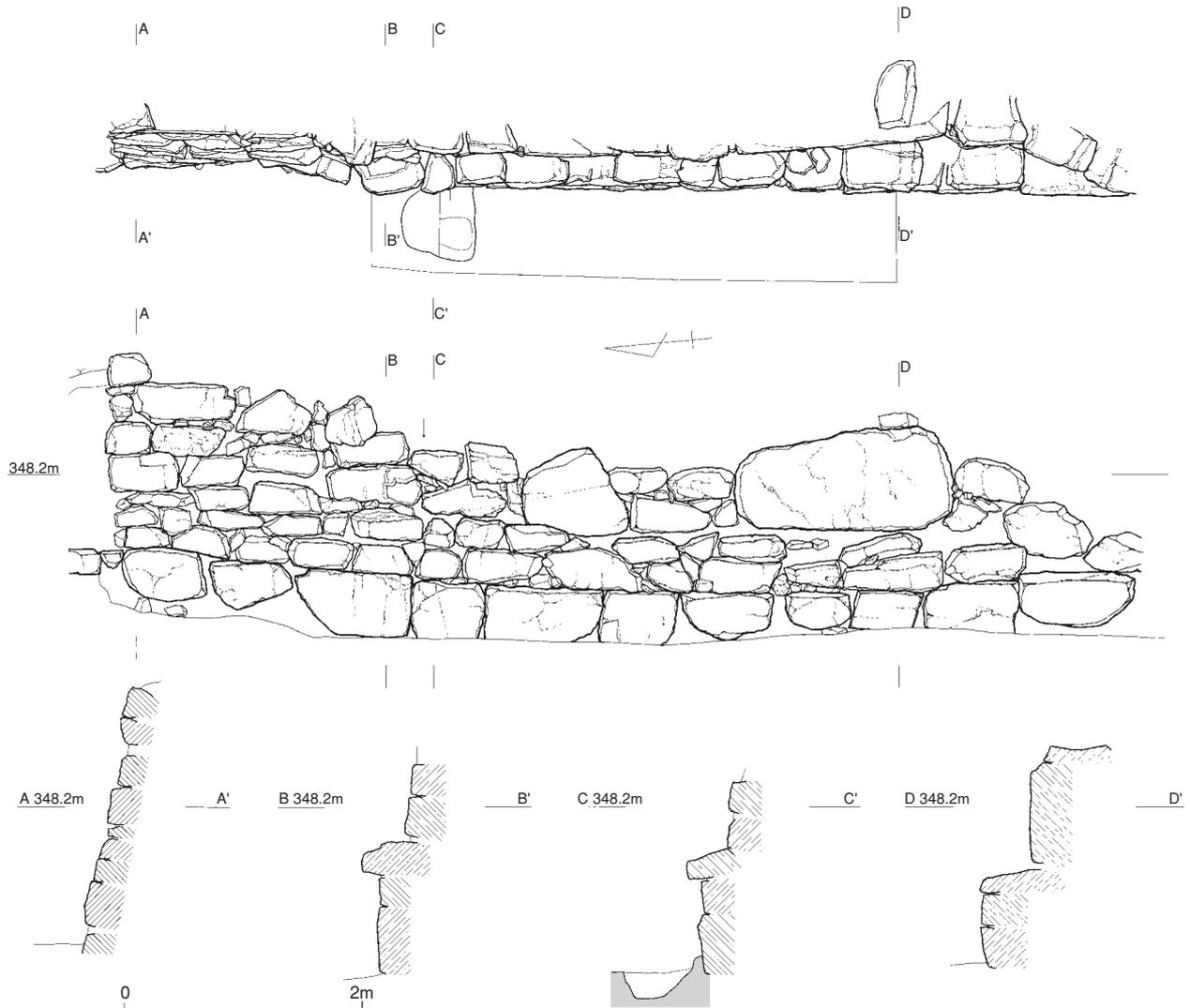


第39図版 調査後の北門跡(南から)

城門が所在する区間は谷頭に位置するため味方折れの区間となり、そのほぼ中央部に城門が構築されている。

城門の前面は小さな谷頭の斜面で、かなりの急斜面である。右側の城壘の前面の斜面にはほとんどみられないが、左側の城壘の前面下方にかけて、高さ1mほどの低い石垣が3段3列にわたって築かれている。城内側は、門道部奥の内側城壁から15mほどで第4水門側の谷頭となり下降傾斜している。このため、城門内の平坦部は狭小である。

<右側の城外側城壘> 調査した範囲内には二つの折れを伴うことから、区間的には3区間に分かれ



第60図 右側の城外側城壘 立・平・断面図 (S=1/60)



第40図版 城外側城壘版築土壘 (西から)



第41図版 城外側城壘石垣 (北から)



第43図版 版築土塁（南から）

第42図版 城外側敷石（南東から）

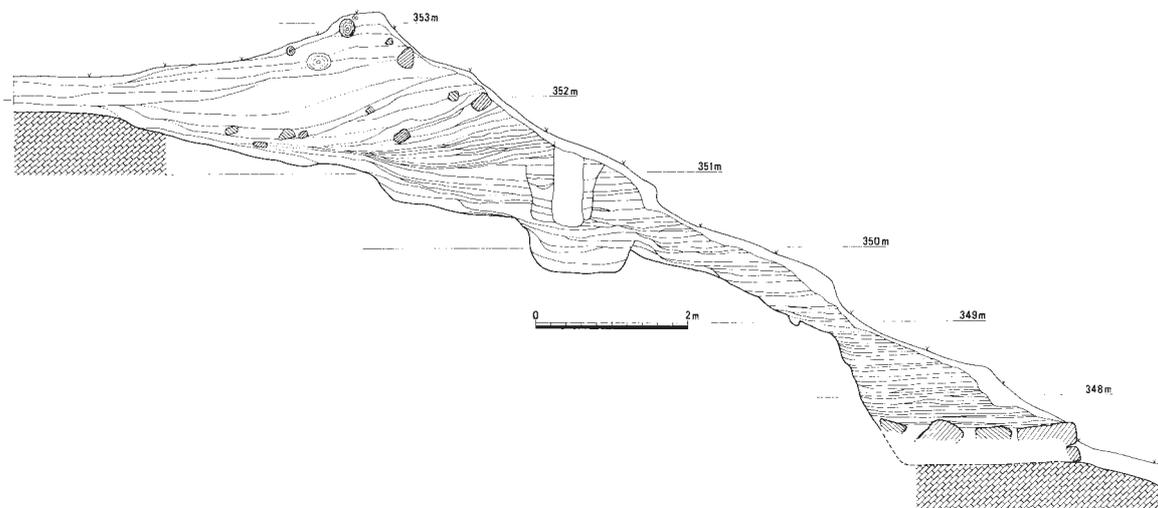
る。門道部右端から10.2mは6～7段積み of 低い石垣が城壘下部を構成し、その上部は版築で積み上げているが、石垣上面から上は流失が著しい。石垣は最下部に50～100cmほどのやや大型の長方形や方形の石材を横長につかい、天端を合わせて並び置く。2、3段目はやや小型材で積み上げている。次区間との折れ部のあたりは80度くらいの勾配で、高さ2m強に積み上げているが、折れ部から1mほど城門寄りのあたりからは徐々に控え積みとし、城門に近いところでは35～40cmほど控えて積んでいる。このため、この石垣は大きくみると2段の段築の石垣となっている。城門のあたりは石垣が崩れているが、創築時には2mほどの高さをもつ石垣積みであったことは、転落した石材の数量からみても間違いなからう。石材は殆どが花崗岩である。

次区間は38度外折した長さ21mの版築土塁の区間である。1段1列に外側列石を置き、その上部は版築で積み上げた区間である。前区間側は版築土塁の外側は2m強の高さで残るが、次区間へかけて徐々に高さを減じ、次区間寄りの5mほどは列石上部から流失している。比較的良く版築層が残っている部分の中央部は大きく溝状に抉れているが、これは流水によるものらしく、おそらく近代になってであろうが、砂防工事時に修復されたようで、その上位には砂防低土段が築かれている。版築の各層は厚薄さまざまだが、ここでも版築時の横位の単位らしいものはみられない。ただ、城壘の前面に残存する敷石の状況からすると、外側列石との間に20～30cmほどの敷石空隙部がある。観察用の畦を残さずに排土したが、下層の版築層は堅く、また敷石が全体的に動いたとは考えられない状況であった。こうしたことからみると、版築施工時の何らかの原因で部分的ではあるが、列石と敷石の間に空隙部のあるところは、列石の前面が版築層で被覆されていたものと思われる。

なお、石垣に近い部分の版築層は、各単位層が石垣までのびているが、下部50cmあたりから斜め上方に同一層内でも版築層に硬軟がある。この区間の版築層を構成し、それを掘って石垣を構築したのか、判断に迷うところだが、土層的には同時併行とみるのが順当であろうか。版築に用いられた原料土は真砂土であり、下方の80cmほどの版築層には細砂が、それより上方には粗砂が目立つ。

次区間は小さな谷部になるところで、2石あるが1石は動いている。内折する区間で、およそ35度くらいであろうか。

調査は城壘の外側と表土の排土除去を行ったのみで、城壘を横断的にトレンチで掘り抜いていない。ただ、平成11年度に岡山県古代吉備文化財センターが、この区間の次区間よりでトレンチ調査してい



第62図 版築土塁の土層断面 (S=1/100) 註1書より

るので、その土層図を参考までに転載しておきたい。

城堡の構築にあたって、城堡の前端となる部分の地山を2m強ほどの幅で削平し、大型の花崗岩の石材を据えて外側列石としている。通常、列石は1石を据え置くだけだが、ここでは削平した掘り方内一杯に2、3石を天端を揃えて裏込め状に充填している。これほどのものは鬼ノ城では珍しい。版築土は真砂土で、列石上の1m強は3～5、6cmの薄層である。その上層の2.5m強は、それより下層より概して厚層である。列石から版築層が3.5mほど積み上がったあたりで、土塁中の柱穴用の掘り方が穿たれている。トレンチの反対側の壁にも同様の掘り方があり、調査担当者によると布掘りとのことである。この掘り方の下にもより大きい掘り方状のものがあり、それを埋めているような土層の状況である。他区間での知見からだが、このような土塁中の柱穴については、外側列石前面の柱穴を版築用の堰板を固定するものとみなし、その柱を土塁中の柱で支持するものと想定したところである。後日、二つの柱の高低差からその誤りに気づいたが、こうした土塁を横断した図をみると尚更である。この問題については別項でふれたい。

土塁中の柱の掘り方までは、版築層は城堡の横断面に対し水平状態の積み上げだが、その上位の版築層はまた薄層になるものの、各層は城内側へ向けて下降した積み方であるが、これは地山の高さ起因しているのであろう。他区間での事例では、城堡の内壁となる内側列石は、版築層の天端高近くになってから掘り込んで、ほとんど柱に接するような状態で据え置いている。そうした事例や城内側からの流水を考えれば頷けるが、問題はその上層である。大きめの石材を含んだやや軟質の層状盛土が2m弱ほど積まれている。この二つに大別できる土層は、層の厚薄、硬軟に大きな違いがある。同一工程のものなのか、それとも修復などによるものなのか、俄には判断できない。このことについては、北門跡の城堡を報告するなかで考えていきたい。ここでは城内壁となる内側列石は、明確な状態では確認できない。敷石は城門寄りの下部を石積みにしたところにはみられない。もともとこの部分に敷石を敷設していなかったとは他の城門の事例をみても考え難く、流失したものと思われる。次区間の中央部は欠失しているが、頭部には部分的に、尾部には幅1.8～1.9mという幅広さで残存している。なお、次区間との折れのところで柱穴を1穴検出した。

<左側の城外側城堡> 城門部左側の城堡は、右側とはほぼ直線状になるもので、長さ13.5mと推定される。全掘していないが、掘り下げた城門寄り2m強は外側列石がなく、地山上から版築で積み上げ

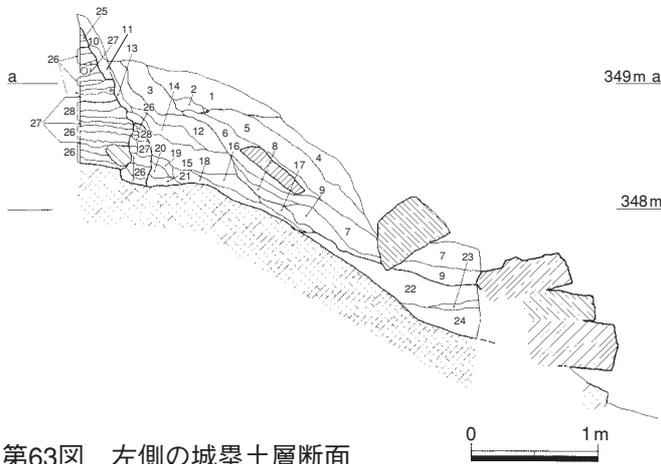
ている。次区間寄りからは4 mほどの範囲で外側列石を検出した。この外側列石が城門側へどこまで据え置かれているのかは、未調査のため不明である。列石上の版築層は流失や近代の砂防工事で削られている。次区間は33度外折する6 mの区間で、花崗岩を用いた外側列石はよく残っている。ここも版築土塁の流失は前区間同様に著しい。その次の区間は残存する外側列石の状況から、20度外折する区間で、やはり土塁の流失は著しい。



第44図版 左側の城外側土塁
(北から)



第45図版 左側城壁の外側列石
(北東から)



第63図 左側の城堡土層断面
(S = 1/60)

- | | | |
|-----|-------------------------|------------------------------|
| 砂防段 | 1. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) | 17. 15とほぼ同じ |
| | 2. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) | 18. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) |
| 流土 | 3. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) | 19. 16とほぼ同じ |
| | 4. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) | 20. にぶい黄褐色土 (10YR7/3) |
| | 5. 4とほぼ同じ | 21. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) |
| | 6. 黄褐色砂質土 (10YR5/8) | 造成土 |
| | 7. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 22. 灰黄褐色粗砂 (10YR5/2)、軟 |
| | 8. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 23. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)、軟 |
| | 9. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) | 24. 灰黄褐色微砂 (10YR6/2)、軟 |
| | 10. にぶい黄褐色粗砂 (10YR6/3) | 版築盛土 |
| | 11. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) | 25. 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) |
| | 12. 灰白色砂質土 (10YR8/2) | 26. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)、硬 |
| | 13. 11とほぼ同じ | 27. にぶい黄褐色細砂 (10YR7/3)、硬、粗砂混 |
| | 14. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 28. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)、硬 |
| | 15. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | |
| | 16. にぶい黄褐色微砂 (10YR6/3) | |

<右側の城内側城堡> 城内壁となる門道部寄りの区間は、長さ13mの区間で、下部は数段積みの石垣で構成されている。中央部近くに設定したサブトレンチの調査状況では、風化花崗岩の地山を掘削、整形したのち、10段ほどの石垣積みになっている。石材は花崗岩が主体で長さ1 mを超える長方形材もあるが、全体的には小型材が多く、また積み方も雑然としていて脆弱な積み方との印象をうける。サブトレンチでの石垣の高さは1.9mになるが、門道部の石垣が城内壁より奥の城内側へ「ハ」の字状にのびており、この城内壁の石垣が全部が露出していたとは考えられない。全掘していないので確定できないが、この石垣の門道部側は半分くらいの高さまで埋め殺しになっていたことは、土層からみても明らかである。いずれにしても、この区間の城壁は明確な高さをもった夾築である。次区間へは当然のことながら城外側と同角度で外折する。石垣は前区間までで、小型材が1石置かれるだけであるが、それも折れから1.5mほどであり、その先は未調査である。ただ、先に図示したトレンチ図(第62図)にも基底石となる内側列石は見当たらない。

<左側の城内側城堡> こちら側はモトクロス場廃止後の修復であろうか、城堡の一部が削られたり、道がつけられ、U字溝が設置されたりしてかなり改変しているため、調査後の保護のことを考え十分



第64図 右側の城内側城壁 立・平・断面図 (S=1/80)

第65図 P2断面図 (S=1/60)

な調査ができていない。門道部から4mほどの範囲で、内壁となる石垣の上部を検出したのみであるが、右側区間と同様の状況になるらしいことは、地形的に頷けることである。想定される区間の長さは、城外側の折れの状況から21m前後であろうか。この区間も夾築となる。

以上のような状況から、門道部の左右の区間の城壁の幅はほぼ10mとなる。

<土塁中の柱穴列> 右側の城塁中で9穴、左側で3穴を検出した。位置は城塁の城外側前端から6.5m内側で、城内側からは3.5m内側である。このように城塁の内側寄りで検出されるのは他の区間でも同様であり、城門柱の後柱筋に一致するのをもた同じである。柱間距離は250～320cmであり、この間隔も他の区間と近似している。このうちP2は半裁して掘り下げた。やや広い掘り方があるが、ここでは布掘りにはなっていない。版築の積み上げ状況は第62図とよく似ており、掘り方より上面の版築土は水平とならず、城内側へ下降するような積み方であるが、上方になるにつれ水平に近くなっているのは、城内側石垣の構築と関連しているのであろうか。柱径は底径で38cmある。

土塁中の柱に接するようにして、他の区間では内側列石が据え置かれるのが一般的である。城門部は城塁上面にも敷石があり、やや趣を異にするが通常区間では原則的に柱に接して内側列石が据えられるが、ここではそれが見当たらない。しかし、土塁中の柱と城内壁のほぼ中間には、内側列石より小型の石材が直列的に認められ、石材の面を城内側へ向けて揃えている。1段1列に並べ置いたにしては数が多く、他区間でみる内側列石に比べると雑然としており、疑問に思い右側城塁の城門寄りの一部を掘り下げた。そこには敷石と思われる石材が敷き並べられていた。全体的に掘り下げたわけではないので速断はできないが、城門部寄りには敷石が敷設されていた可能性が高く、城門部を離れるにつれ消失するようである。こうした状況は西門跡や南門跡でもみられたことである。

なお、左側の城壁も右側と同様の小型材による石列がみられるが、門道部奥の石垣がかなり内傾しており、無理をすれば流水による崩落の懸念もあるため、検出のみにとどめた。状況的には右側城壁と同様なものになると思われる。

なお、城門の構築にあたっては、周辺の版築土塁をかなり高く積み上げたのち、門道部となる部分を掘り下げたから構築している状況が門道部脇の土塁で観察できる。

(4) 城門

城門は、味方折れとなる谷頭に位置する30m弱の区間のほぼ中央部に構築されている。基本的な構造は他の3門と共通するが、柱の組み合わせと排水溝を有する点は異なっている。

<床面> 床面を石敷とすることは他の3門と共通するが、入口側から奥へかけての2/3ほどは大型の花崗岩を敷き、奥側の1/3ほどは主として小型のアプライトを敷石状に敷いており、この点は他の3門と異なっている。花崗岩を用いた石敷部のうち、左側の門礎とその周辺の石敷材は不動だが、右側の門礎と両門礎間の石材およびその前面の大型材は動いており、それより前面は欠失している。とくに門礎間の蹴放しを刻んだ石材は、あきらかに人為的になんらかの目的をもって動かされており、ともに上面が右側の門礎側へ横向きになった状態である。また右側の門礎も上面が傾いており、右側の柱筋ともかなりずれている。こうした状況をみると、どうやら何かの遺構と間違えて盗掘したように思える。あたかもそれを証するかのようになり、その下の暗渠排水溝の蓋石も大半を欠失している。

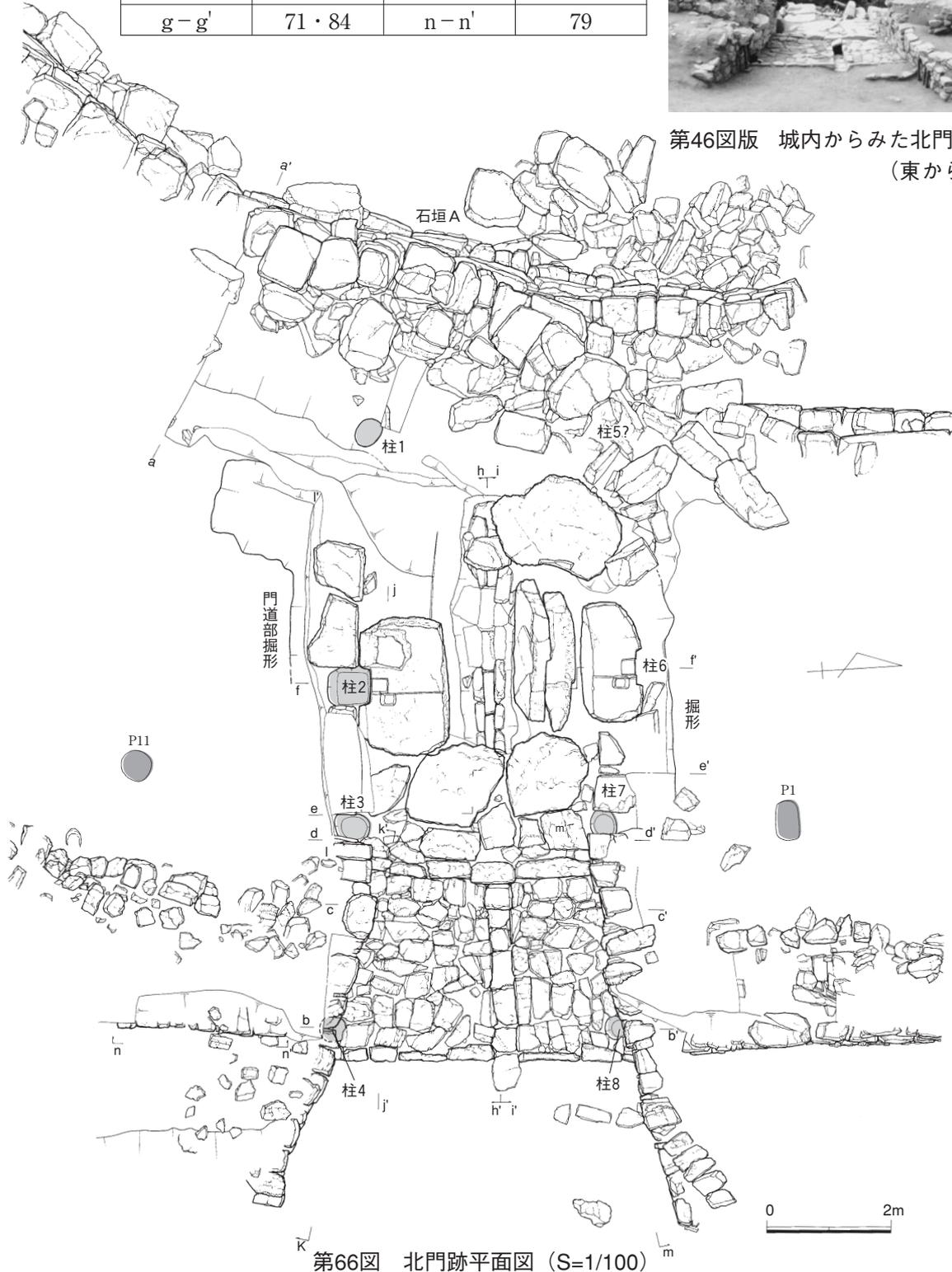
左側の不動の門礎は200×140cm、厚さ46cmほどの大型の花崗岩で、一辺55cmの「コ」の字状の柱添えの方形の削り抜き、22×25cm深さ12cmの方立穴、23×18cm深さ16cmの軸摺穴、段差6～7cmの蹴放

表4 断面位置対照表

断面位置	ページ	断面位置	ページ
a-a'	78	h-h'	85
b-b'	84	i-i'	85
c-c'	84	j-j'	85
d-d'	84	k-k'	87
e-e'	84	l-l'	87
f-f'	84	m-m'	87
g-g'	71・84	n-n'	79



第46図版 城内からみた北門跡
(東から)



第66図 北門跡平面図 (S=1/100)

しが刻まれている。蹴放しからみて扉は内開きとなるが、方立穴の前側には70×60cm大、高さ10cmの削り残しがある。扉の開閉には支障のない位置なので省力化したのであろうか。門礎石の上面はきれいに調整、研磨されており、また扉筋側の側面も同様に調整研磨されている。動いている右側の門礎は180×80cm大で厚さ46cmと少し小さいが、柱添えの削り抜き、方立穴、軸摺穴、蹴放しが刻まれており、上面側面ともに調整研磨されている。この右側の門礎の前面には200×150cm大、厚さ10～20cmほどの薄い大型材が傾いて残り、一端に一辺50cmほどのコの字状の抉りがきざまれている。抉りは門礎のように上面から垂直ではなく、斜めに刻まれている。この石材がどのように使われていたのかは不明である。

床面の前端がどこまであったのかは、石材が欠失しているため不明だが、左側の前端の柱1の位置や右側の城壁の石垣の位置からみても、それを延長したあたりまでは床面がのびていたとみても良いように考えられる。そのように考えると、その前面の石垣との関係が問題になるが、そのことについては後にふれたい。

奥側の床面は大型の花崗岩の石敷の端部から、5石の花崗岩の長方形材を床面の長軸に直交して並べ置いている。一方城内側の端部は、右側の城内壁のラインとほぼ一致しているが、左側の城内壁とは僅かにずれる。また右側の端部には板状石を立て置いているが、これは城内からの流水を意識してのことであろう。この間を主としてアプライトの小型材で丁寧に充填しているが、両端部分に比べると数cm～10cmほど低くなっており、両側壁側が高く中央の排水溝へ向かって少し低くなっている。石材の大きさといい、並べ方といい、敷石とそっくりである。花崗岩の大型材を用いた石敷部分の平面形は長方形になるのに対し、この部分の平面形は壁面の石垣が城内側に開くため台形状になる。門道部床面の石敷の状況がこのように異なっているのは、この北門跡のみである。

<門柱> この城門は掘立柱の城門であることはいうまでもない。門柱に仮番を付して報告するが、柱5・6の2穴は未検出である。柱5は崩落した石材が散乱しており、また柱6は門礎が動き傾いているため、今回は調査ができていない。

柱1は丸柱で底径38cm。検出面からの深さは85cmだが、復元した床面（石敷上面）からの深さは240cmにもなる。柱2は本（親）柱で、門礎のコの字状の加工から一辺最大55cmの角柱である。深さは228cm。柱3は丸柱で径42cmである。深さ90cmほどのところで柱痕とは異なるやや堅い層にあたったため掘り下げのを中断した。狭い柱穴内での手探りでの掘り下げのため判断に迷うが、他の柱穴の深さからみてもっと深い可能性がある。柱4は径30cmの丸柱である。壁面の石垣が内傾して危険であり、検出のみで掘り下げは行っていない。対になる柱8と同じくらいの深さになるのだろうか。柱7は上面径35cmで深さ145cm。底径は図中で23cmだが、掘り下げが難しくもう少し大きくなるかもしれない。柱8は上面径31cmの丸柱で深さ110cm。これも底径はもう少し大きくなるだろうか。ところでこれらの柱穴列は、全部が揃っている左側についてみると、本柱の柱2を基準に軸線を引いてみると、柱3は軸線にのるが、柱1は柱1本分内側に、柱4は1本分外側にずれる。そうしたことをふまえて柱間距離を示せば柱1～2間が413cm、柱2～3間が225cm、柱3～4間が327cmとなる。反対側の柱6の門礎は動いているが、柱7と8は左側の柱穴列と同様の形状をみせているから、それらをもとに復元的作業を行うと、門礎間の扉筋の柱間口は400cm扉間口は軸摺穴の心心間で295cmとなる。ただし、これらの数値は動き傾いた門礎の、あくまでも図上復元であり、多少の誤差があるものと推定される。

いずれにしても柱間の間隔が不揃いなのもこの城門の特徴ではある。

この北門跡は間口が1間なのはいうまでもないが、問題は奥行が2間になるのか、それとも3間になるのかである。調査時の観察では、柱8本の内のいくつかが改築等に伴うものとは考えられない状況であった。ただ、柱4と8は柱3と7に似た規模の大きさである。深さはやや浅いものの、柱1、2に比べれば柱3も浅くなっており、全体として前柱が深く、後柱が浅くなっているのは床面から地山までの深さに起因しているとも考えられる。

もう一つ理解しづらいのは柱の組み合わせである。門礎の加工の仕方からみて、本柱が角柱であることはいうまでもない。問題は他の6本（柱5は未検出）が丸柱ということである。

鬼ノ城の他の城門では西門・南門は12本とも角柱であり、東門は6本とも丸柱である。また城門ではないが、角楼は6本ともに角柱である。これらに比べると北門の柱は特異な組み合わせといわざるをえない。

以上のような状況から、北門は間口1間（400cm）で、奥行は最後列の柱（柱4・8）を含めて3間（965cm）となるのか、柱4・8を上屋には直接的には関係しない補助柱的なもの、または城門とは別の施設に関わるものとみて2間（638cm）となるのだろうか。床面の石敷の範囲、柱3、7と土塁中の柱穴列の一致などを考えれば、1×2間の可能性が強いようだが、浅学な筆者には判断がむずかしいが、奥行2間の可能性をみておきたい。

調査ではこの城門に屋根があったかどうかはわからないが、もし屋根があったと仮定しても奥行3間での屋根形は異様なものとなり、また2間としても本柱と前柱との柱間413cmに対し、後柱との柱間225cmはおよそ倍半分で、不釣り合いとなる。屋根のない埋門的な城門と捉えれば、奥行の問題はある程度理解できようか。ただ背面側唯一の城門であり、搦手門的な城門としての性格をもつが、



第47図版 柱1土層断面（北から）



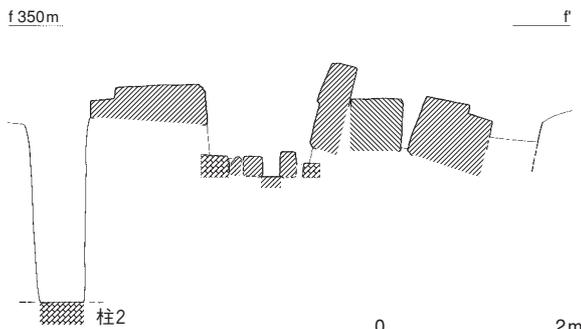
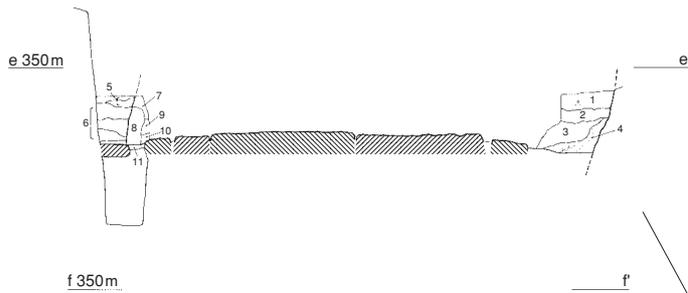
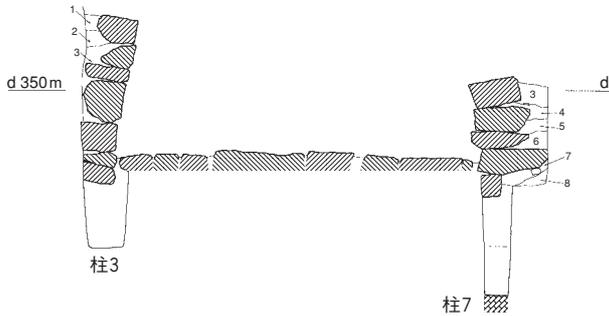
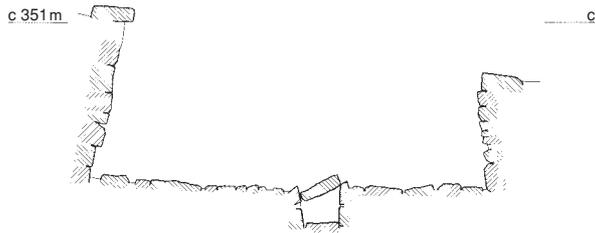
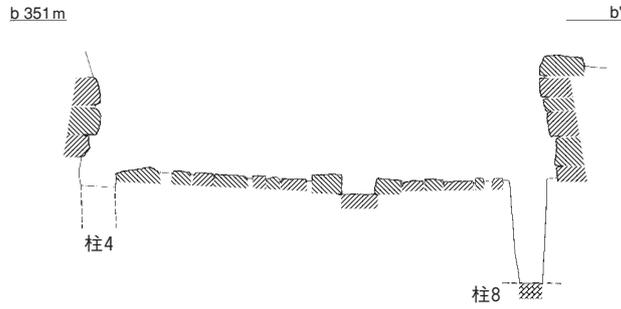
第49図版 加工痕のある床面材（東から）



第48図版 柱2（南から）

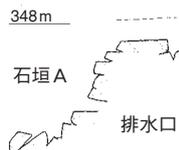


第50図版 柱8（南から）

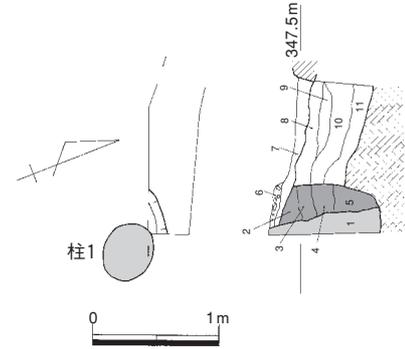


g 351m

第67図 門柱断面図 (S=1/80)



第69図 北門跡各部断面図 (S=1/150)



第68図 柱1平・断面図 (S=1/60)

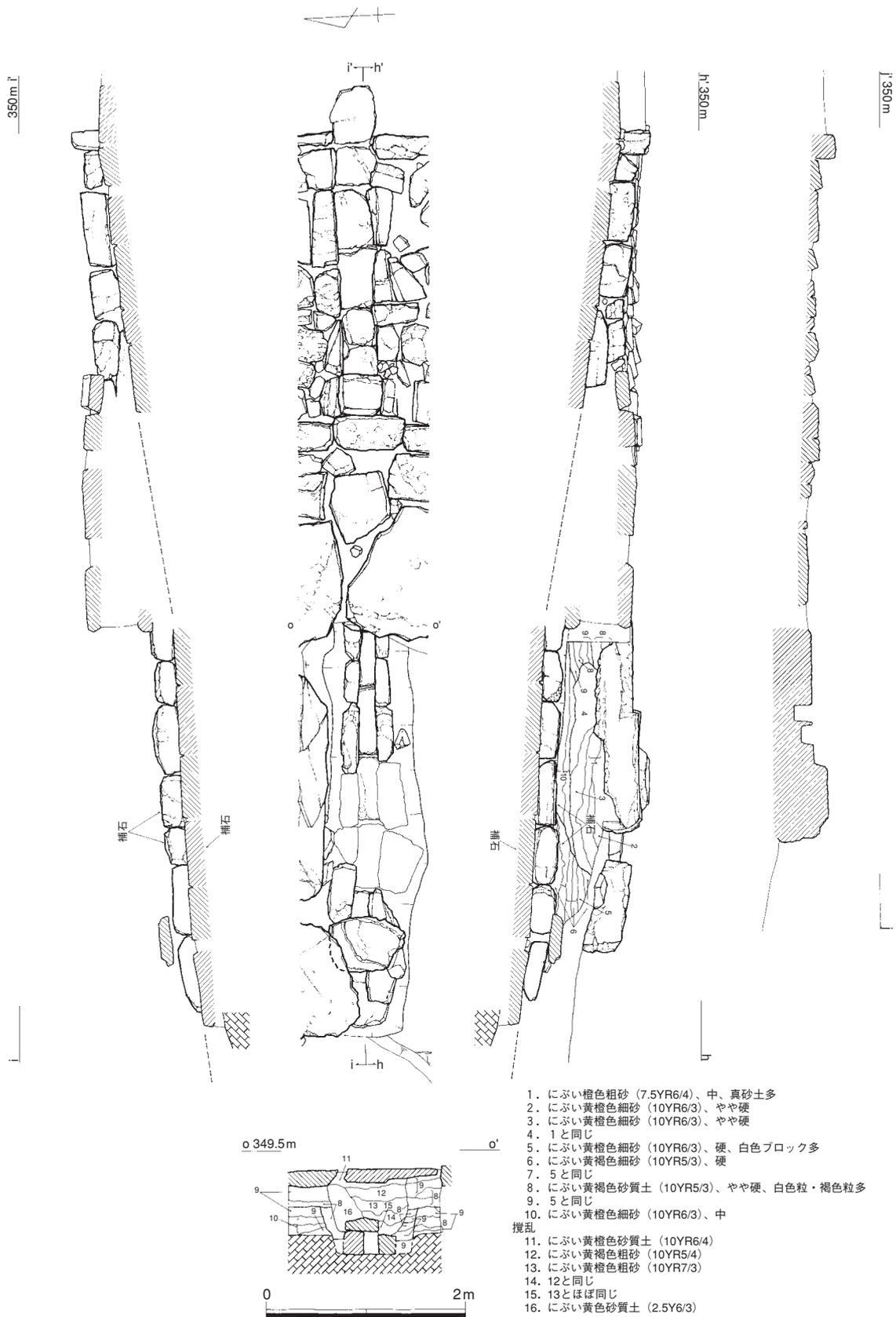
- 柱1柱痕
柱掘形
- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)、弱 | 6. 橙色土 (7.5YR7/6)、硬、白色ブロック混 |
| 2. 灰白色細砂 (2.5Y8/2)、やや硬 | 7. 灰白色粗砂 (10YR8/2)、硬 |
| 3. 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1)、硬、灰色土混 | 8. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、硬、暗褐色土混 |
| 4. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、硬 | 9. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、硬、暗褐色土混 |
| 5. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/3)、やや硬 | 10. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)、中 |
| | 11. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、硬 |

- | |
|----------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4)、硬、白色ブロック多 |
| 2. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3)、硬 |
| 3. にぶい黄褐色細砂 (10YR7/4)、硬 |
| 4. 灰オリーブ粗砂 (5Y5/3)、硬 |
| 5. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)、硬 |
| 6. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)、硬 |
| 7. 灰白色粗砂 (2.5Y8/2)、やや硬、真砂土 |
| 8. にぶい黄褐色粗砂 (10YR7/3)、硬、褐色土混 |



第51図版 柱3の板壁痕跡 (東から)

- | |
|----------------------------------------|
| 1. 灰オリーブ粗砂 (5Y5/3)、硬 |
| 2. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)、硬 |
| 3. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)、硬 |
| 4. にぶい黄褐色微砂 (10YR6/4)、中 |
| 5. 灰白色粗砂 (2.5Y8/2)、硬、真砂土 |
| 6. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)、硬、褐色ブロック少、白色ブロック少 |
| 7. 淡褐色粗砂 (5YR8/4)、中、真砂土 |
| 8. 9. にぶい黄色微砂 (2.5Y6/4)、硬 |
| 10. にぶい黄褐色粗砂 (10YR7/3)、硬、褐色土混 |
| 11. 灰白色微砂 |



第70図 排水溝など立・平・断面図 (S=1/60)

周辺部の嚴重な防禦施設の存在（斜面の石垣群）を考慮すれば、中世の絵巻物にみる門上に端板を回した二階門的な可能性もあろうか。そのように考えれば奥行3間とみてもよいように思われるし、その可能性もあながち否定できないかもしれない。

＜排水溝＞ 鬼ノ城の城門では初の検出事例である。平成9年度の確認調査でその一部を検出していた排水溝である。門道部石敷のほぼ中央部に付設されており、一部は明渠だが大半は暗渠排水溝である。上方に集水桝等の設備はなく、城内の流水を直接受ける。排水溝は小型材を用いた石敷の端部から付設されている。花崗岩の平石を立てて側壁とし、底部にも同様の材を敷いているが、1石のみは溝外まで敷いている。おそらく流水によって抉られることを懸念しての措置であろう。また城内右側に3石が配されているが、これは溝内への導水のためと思われる。明渠部の溝は長さ2.9m、幅0.4mでやや先細りになる。溝底は9度ほど下降しており、蓋石が1石残っている。大型材の花崗岩を用いた石敷部からは暗渠となる。石敷材が原位置を保っている部分の状況は不明だが、扉筋周辺では盗掘のため露出している。構造的には明渠部と同様だが、15～20cmとやや幅狭になる。側壁の4石と蓋石の1石を除き他は欠失していたが、側壁の4石は周辺の保護のため調査後に復元した。溝底の下降度は明渠部に比べ緩やかな3度の勾配で、未掘部分の下の溝底が傾斜のみなのか、それとも段差をつけて排水しているのかは確認できていない。門道部から先は一部欠失しているが、前面の石垣に開口部分があり、溝底と同様に粘土が堆積していたので、排水はここから城外へ行われていたようである。ただ、この石垣内には覗きみたところ、排水溝の側壁のようなものは見当たらないので、石材間を自然排水していたようである。

この排水溝の全体の長さは13m強となる。溝底の勾配は上半がやや急、中間部が緩、下半が急勾配となっている。



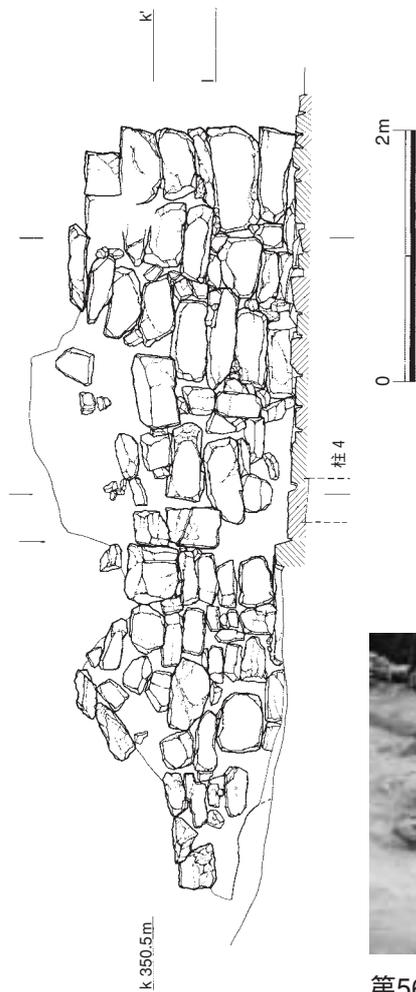
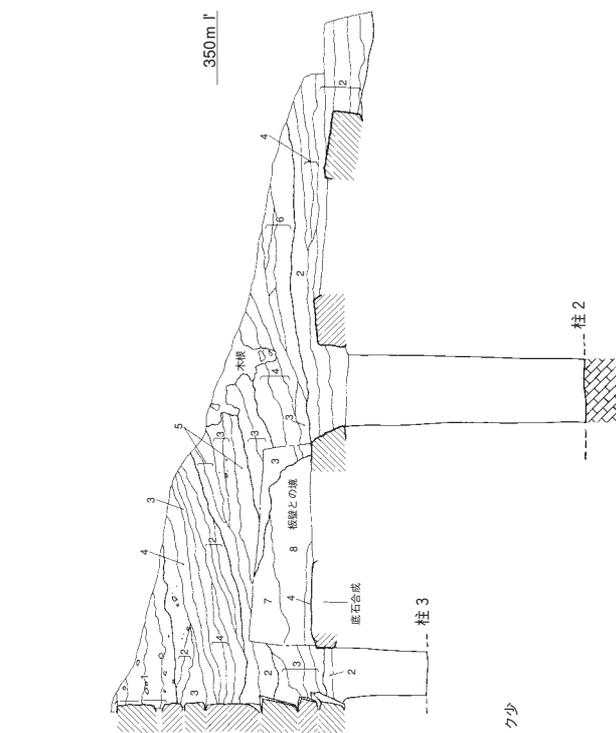
第52図版 排水溝暗渠部（西から）



第53図版 排水溝（南から）

＜壁面＞ 門道部の壁面は、柱3・7より奥は石垣である。長さは6～6.5mで、1.8～1.9mの高さで残っている。城内側へ13～20度開いているので、入口側からみた形状は扇状に開いたものとなっている。左側の石垣は石材を横長に用い、横目地がよくとおっているが、縦目地もかなりよくとおり、いわば重箱積みといってよい積み方である。石材は柱3から4にかけてのものが大きく、それより城内側へかけてのものはやや小型で、積み方も多少粗雑になっている。石材は3石を除いて花崗岩である。全体的にみると縦横に目地のおおる積み方のため、強度に欠けるようである。

一方、右側の石垣は石材がやや小型のものが多く、またアプライト材も多い。横目地は比較的よくとおっているものの、縦目地もとおり、両端は崩れが目立つ。右側の石垣は、城内部では2段になり、上段はさらに開いている。この両側の石垣の間の門道部には、多数の石材が崩落していたから、本来



1. にぶい黄褐色細砂 (10YR6/4)、硬、白色ブロック多、粘質土混
2. 灰白色粗砂 (2.5Y8/2)、やや硬、真砂土
3. にぶい黄褐色細砂 (2.5Y6/4)、やや硬、褐色土混
4. にぶい黄褐色細砂 (10YR7/3)、硬、褐色土混
5. 淡黄褐色細砂 (2.5Y8/3)、硬、褐色ブロック多
6. 淡黄褐色粗砂 (10YR8/3)、やや硬、灰少混
7. 淡黄褐色粗砂 (5YR8/4)、中、真砂土
8. にぶい黄褐色微砂 (2.5Y6/4)、硬

第71図 門道部壁面 (S=1/60)



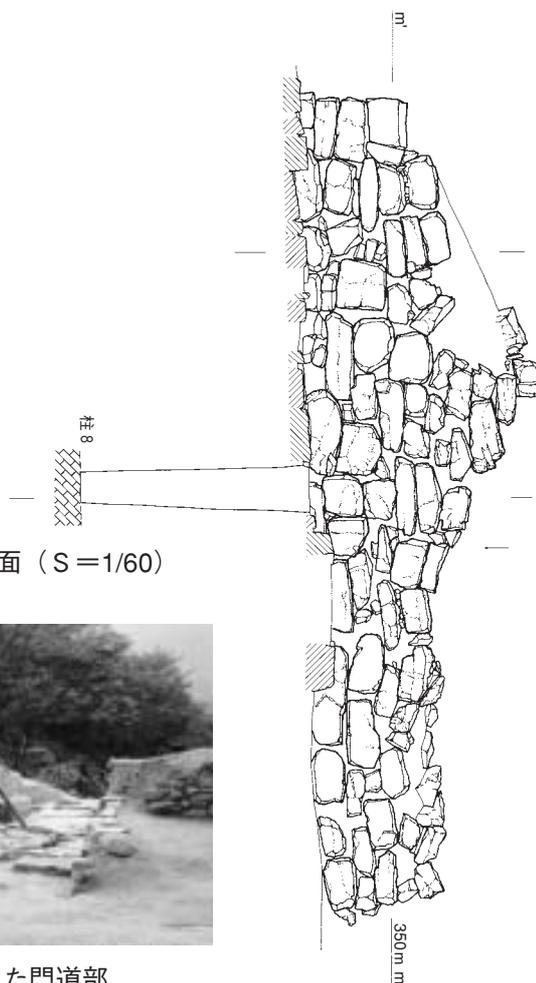
第56図版 城内からみた門道部
(北東から)



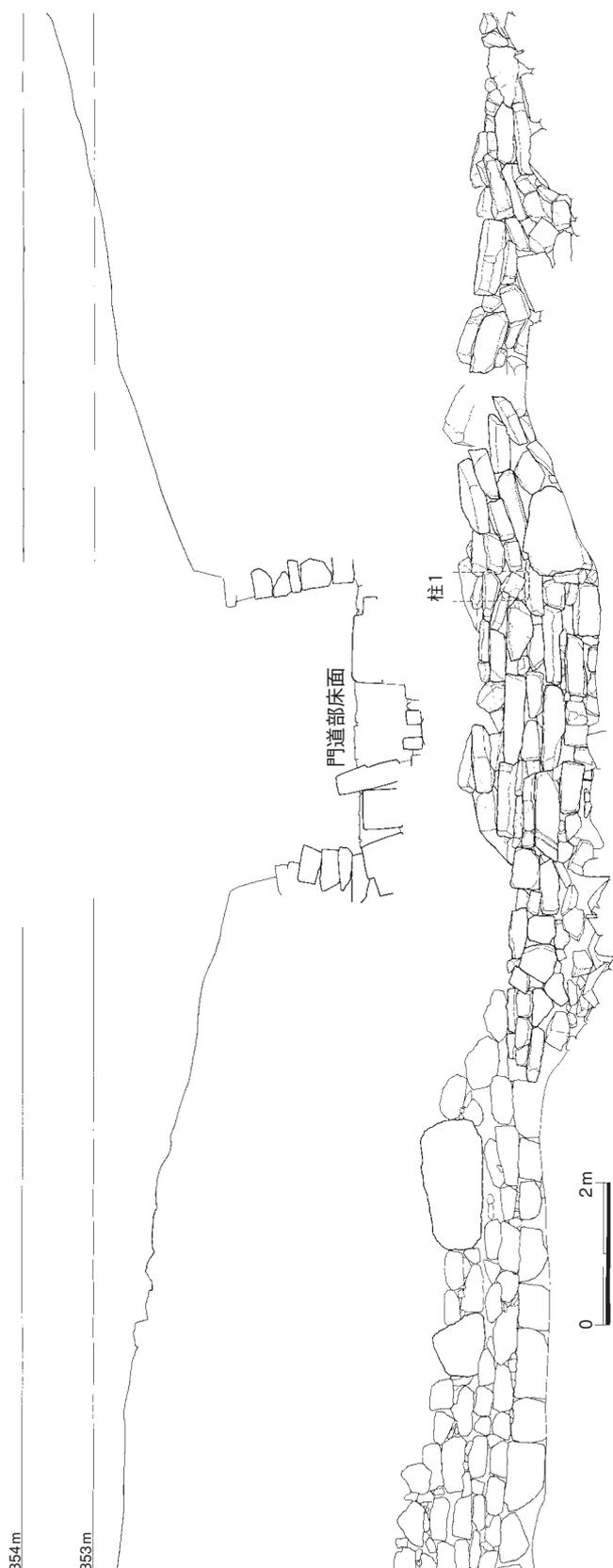
第54図版 門道部右側壁面 (南西から)



第55図版 門道部左側壁面 (北西から)



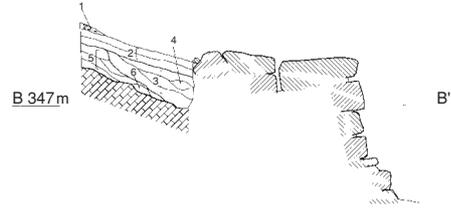
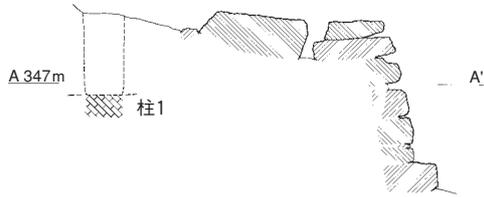
はもっと高い石垣だったのだろう。石垣より前面の門道部の壁面は、すでにかなり崩れていたが、柱2と3の間の壁面が少し残っていたので観察したところ、板壁痕らしい粘質土層を検出した。残存度は良好とはいえないものの、石垣より前面の壁面は板壁であったとみてよい。



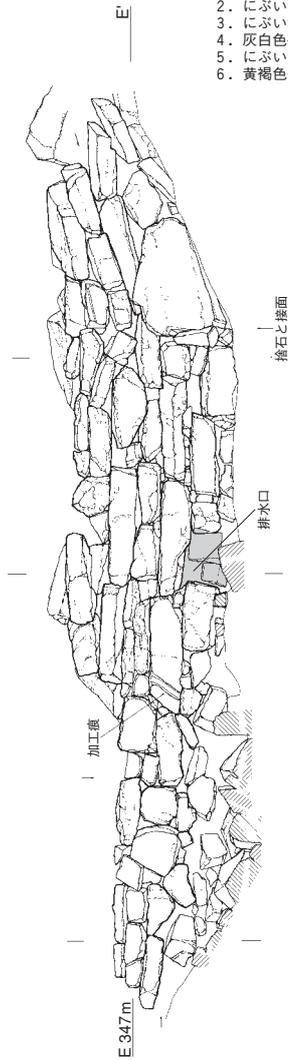
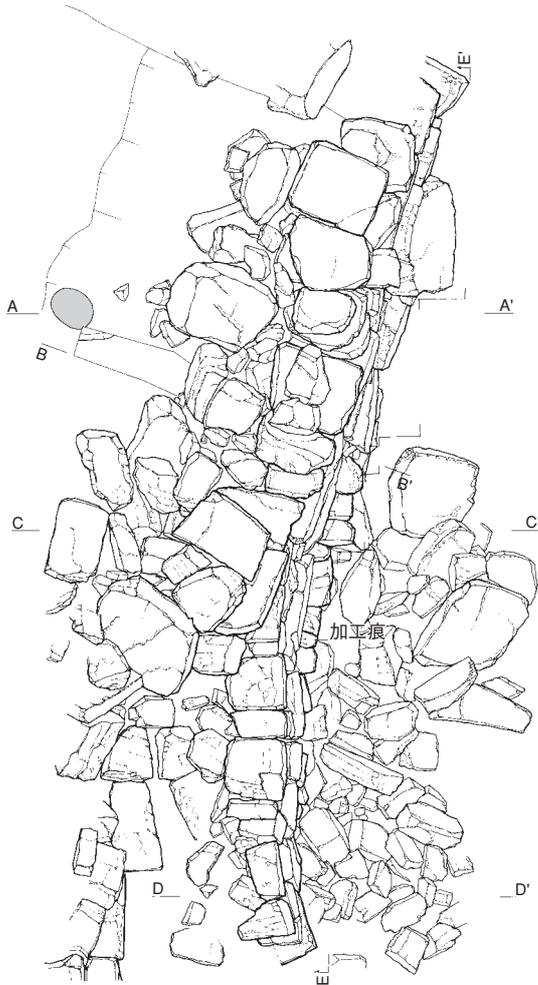
第72図 城外から見た北門跡 (S=1/100)

＜門道部前面の石垣＞ 柱1および5（推定）の3～2.5m前面には低い石垣が積まれている。しかも部分的なものではなく、左側の斜面にも同じように積まれている。途中で9mほど切れている部分があって連続せず、またレベルも多少低いので一体的になるかどうかは不明だが、長さは40余mにもなる。さらに下段にも長さ5～12mほどのものが三か所ある。この石垣は古くから知られていたものであるが、それが築城期のものなのか、それとも後世のものなのか論議のあるところである。これについて報告しておきたい。

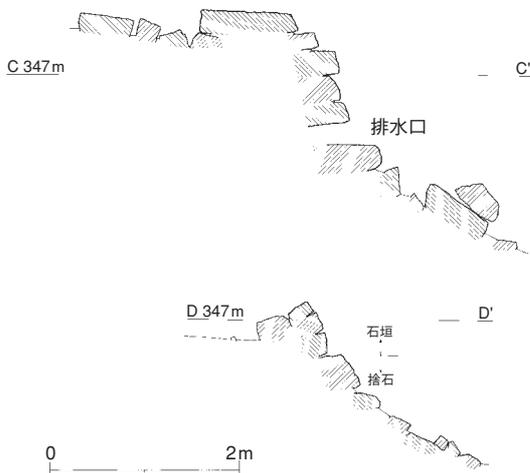
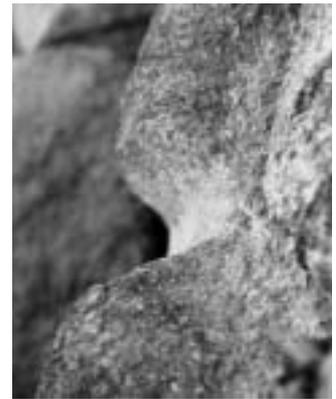
門道部前面の石垣(第58図のA)は長さ15mほどで、明瞭ではないが折れのような屈折部分が三カ所ある。門道部の右側は現状で3mほどで、本来はもっと長かったのかどうかは判らないが、石積み状況からみるとほぼ旧状にちかいかと思われる。花崗岩の平石を横積みにしたもので、基底石から10数cmほど控えて75度前後の勾配で積んでいるが、右端側は高さも少し低く60度くらいのやや緩い勾配である。石垣の前面には大型の平石をはじめ石材が散乱状態で認められるが、これは石垣前面がかなりの急傾斜面であるため、地盤の強化のための措置ともみられる。いわば捨石的なもので、雑然とした状態である。現に100×60cm大



1. 橙色土 (7.5YR7/6)、硬、白色ブロック多
2. にぶい黄褐色粗砂 (10YR7/4)、硬
3. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、硬
4. 灰白色砂質土 (2.5Y8/1)、弱
5. にぶい黄褐色粗砂 (10YR6/4)、硬
6. 黄褐色細砂 (10YR5/2)、中、地山ブロック含



第57図版 加工痕拡大
(直上から)



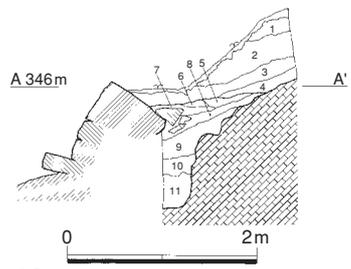
第73図 石垣A立・平・断面図 (S=1/80)



第58図版 加工痕のある石材 (西から)



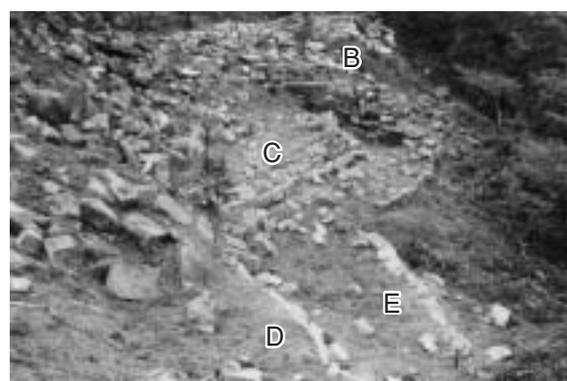
第74図 石垣B立・平・断面図 (S=1/80)



- 砂防
1. にぶい黄褐色粗砂 (10YR7/4)、硬
 2. 1とほぼ同じ、弱
 3. にぶい黄褐色粗砂 (10YR5/3)、弱
 4. にぶい黄褐色粗砂 (10YR7/3)、中
- 石垣裏込土
5. 明黄褐色細砂 (10YR6/6)、中
 6. 明褐色砂質土 (7.5YR5/6)、やや硬
 7. 灰褐色砂質土 (7.5YR5/2)、中
 8. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3)、中
 9. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/3)、弱
 10. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)、強
 11. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)、やや硬



第59図版 石垣Bから北門を望む (南西から)



第60図版 石垣B遠景 (北から)

の五角形状の1石は石垣として積んでいるのではなく、捨石の中の1石であり、それをそのままにして周りの石垣を積んでいる。横目地はよくとおっており、高さは右側で80cm前後、それより左側では120cm前後でやや段差があるが、これは上部が欠失しているというよりも、城門への入城に関わるものの可能性がある。石垣の上面にも2mほどの幅で平石が据えられている。

なお石垣材として据えられている1石に幅6～8cm、深さ3cmほどの溝状の加工、研磨痕のあるものが認められる。転用材だがどのようなものに用いられていたのであろうか。

この石垣は長さ15mほどだが、最左端側は高さも低くなり、多少崩れかかっている。石垣下部の土砂流失によるものである。左端側から9mほどの間には石垣は築つかれていない。露岩も多く、また多くの石材が散乱状態で確認される。石材の透間から観察したが、石積みはないようにみえる。ただここから左側にも同じような石垣(B)があるが、絶対高では1.7mほど下位になる。長さ17m強だが、左端の転落石で隠されている部分に石積みがあるらしいから、もう少し長くなるようである。石材は詰石の3石のアプライトを除き花崗岩である。ここでも地形に起因し、二か所に折れ状の屈折部分がある。基底石を据え、そこから20～30cmほど控えて上段を積むのは前出の石垣と同様だが、勾配はやや緩く60～65度で、高さは80～105cmである。石材は下部と上部には平石を用いているが、その間は小型の不整材が多い。このため横目地のおりは弱く、とくに左端部分の積み方には特徴がある。この石垣の背面にトレンチをいれてみたが、地山の風化土を掘り込んで構築しており、石材は裏込石での固定ではなく埋土で固定、強化している。また天端石は上面を山側に傾斜させている。遺物は出土しなかった。この石垣の上には大きな露岩があり、また前面には多くの石材が散乱状態でみられる。

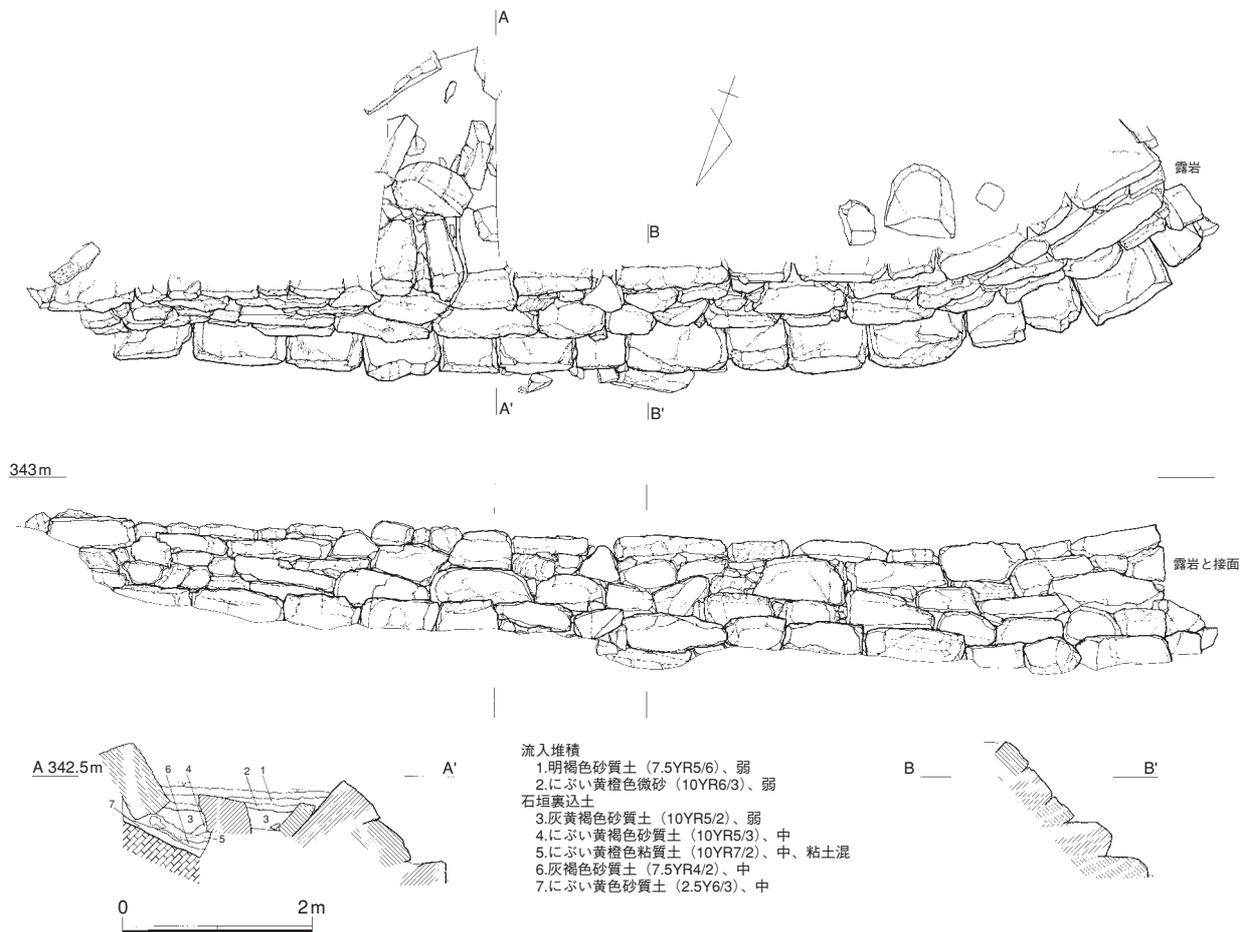
石垣Aと石垣Bの下方に石垣Cがある。長さ12m強、高さ1～1.2mである。左端部分ちかくに縦方向にとおらない屈折部分があり、約15度ほど山側に折れ左端は露岩となる。石材は詰石の1石のアプライトを除き花崗岩で、厚みのある平石の横積みである。基底石から控えて上段を積むのは他の石垣と同様だが、控え幅は25～40cmでやや広い。石垣の勾配は高さに比しやや緩く60度である。ここにもトレンチをいれたが天端石は山側に傾斜し、石垣背面にはかなりの大型石が混入している。遺物は出土していない。

石垣Cの右下、門道部直下下方に石垣Dがある。両端が山側に屈曲し長さは8m弱、高さは1mほどである。基底石から控えて積むのは同じだが、控え幅は20cmほどで小さい。勾配は65度である。ことによると天端の3石は後世に積み直しされた可能性もある。

石垣Dの下方に石垣Eがある。長さ4.5m高さ80cmの石垣で、これまでの中で最小のものである。石材、構築法しも同工である。

これらの石垣は、城内側からみて門道部中心線から左側の斜面に構築されたものである。このほかに規模や積み方を問わなければ、石積みされているところがある。石垣Eの下方と左側である。この二か所は1～2段積みで、石材の大きさ積み方も石垣A～Eのものとはあきらかに異なっており、同列には扱えないように考えられる。また谷筋の右斜面にも似たような石積みがあるが、これはあきらかに近代の砂防石垣であることは、当時の工事に従事した地元の方の証言がある。砂防工事は石垣だけでなく、砂防土段も行われており、調査前の城壁やその前面の敷石が検出されたあたりにも確認された。

ではこれらの石垣A～Eは後世の構築か、それとも築城期の構築なのか。石垣B～Dのトレンチ調



第75図 石垣C立・平・断面図 (S=1/80)



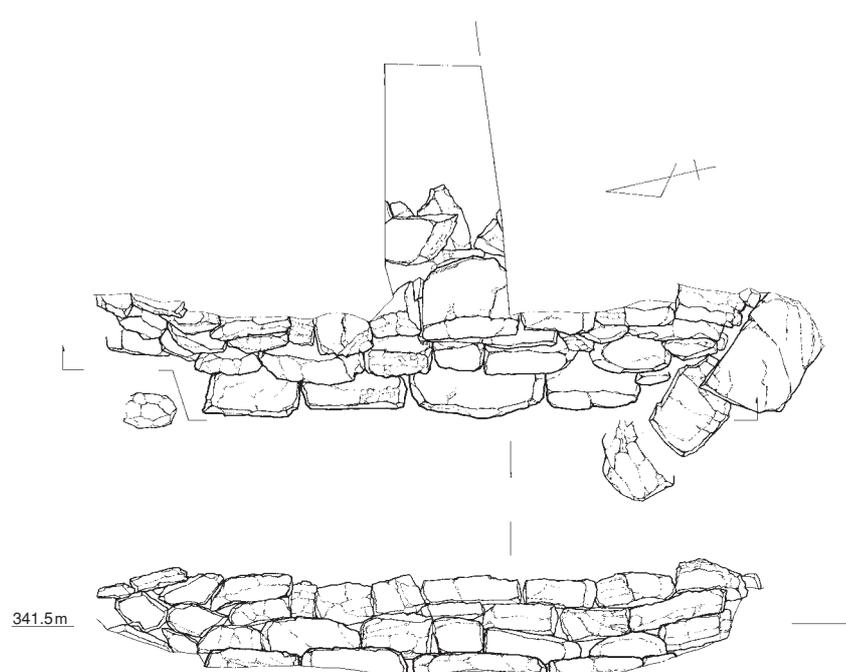
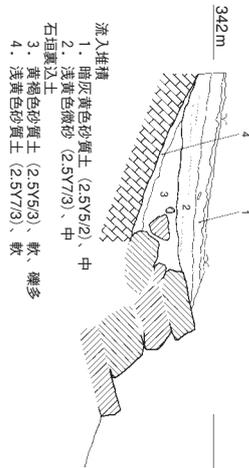
第61図版 石垣C (南西から)



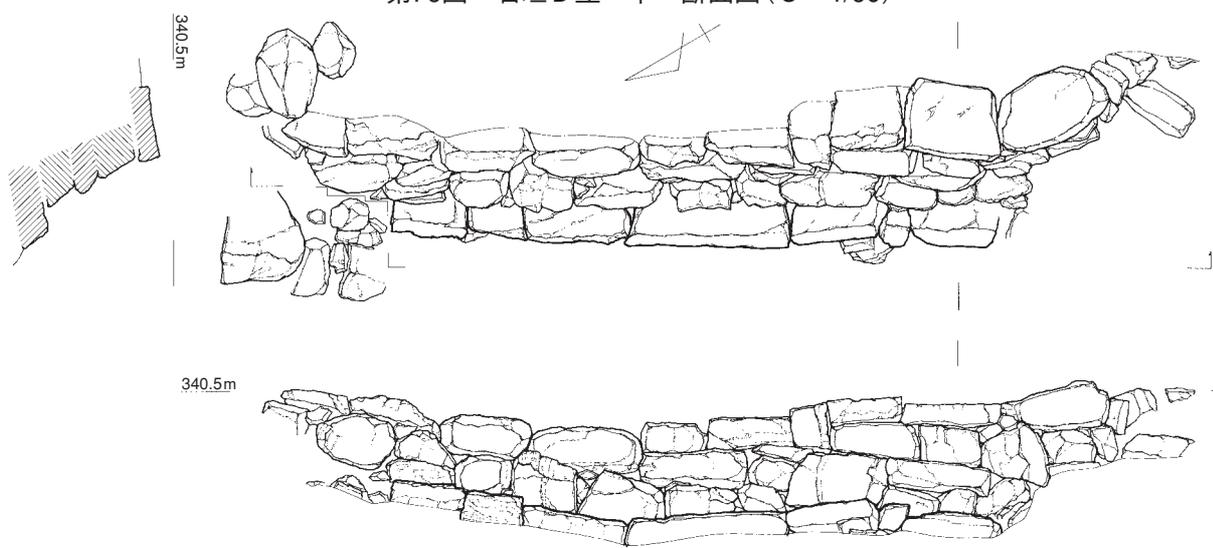
第62図版 石垣Cサブトレンチ (上方から)

査では遺物は出土しておらず、また考古学的に裏付けられたわけではない。石垣A、とくに門道部前面では土層観察によると、門道部の造成土を切って石垣を構築していることが確認できる。しかし後世に石垣を構築したとしても同様の結果となる。石垣内に排水溝が側壁や底石をもって付設されていれば別だが、石垣を解体しての調査はできていない。

では、遺構の状況からはどのように考えられるのだろうか。ここで問題となるのは柱1と未検出の柱5の位置である。門道部地山の傾斜を考えると、柱の直前で門道部の造成が終わっていたとは考えにくい。そのことは敷石が残存している右側の城壁をみれば頷けよう。敷石幅は1.9mであり、城壁前面の造成幅はもう少し広いと考えられる。いまは欠失しているが、敷石は門道部まで敷設されてい



第76図 石垣D立・平・断面図 (S=1/60)



第77図 石垣E立・平・断面図 (S=1/60) 0 2m



第63図版 石垣D (上) E (下) (西から)

たとしても不思議ではない。敷石の第一義的な機能は、城壁の基底部分が流水によって壊されるのを防ぐものとすれば、門道部の前面にも何らかの対応が図られていたはずである。ましてやこの北門は排水溝をもつ城門であり、その水処理は重要であろう。石垣前面の捨石もそうした対応策の一環であると考えられる。

城門前面の石垣が構築されていないと仮定した場合でも、造出面は当然あったであろうし、またなければ谷頭斜面に城門が構築されているのであり、かつまた排水溝から排出される水流を考慮

すれば、城門はもっと流失著しい姿で残存していたことであろう。積極的な証明とはならないが、石垣Aは城門と一体的に構築されたと理解しておきたい。

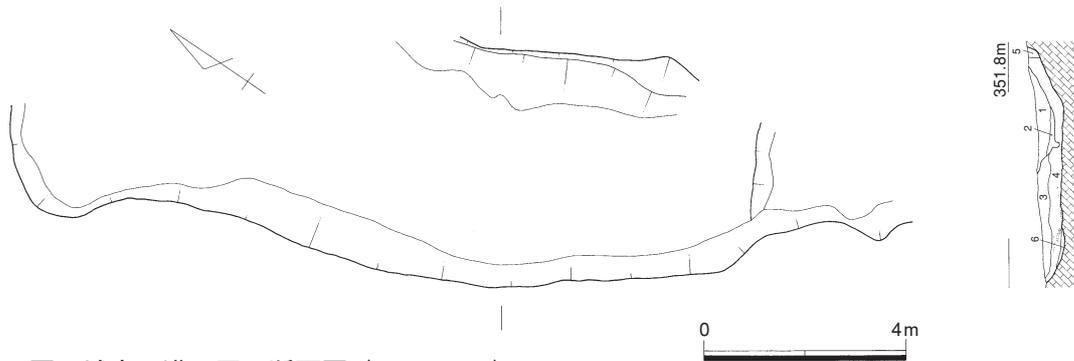
では石垣B～Eはどうか。これらは石材質や積み方が石垣Aと共通しているのはこれまで報告したとおりである。またその位置は傾斜の急な左斜面にのみ構築されている。筆者は斜面保護の役割を考えていたが、向井一雄氏によれば谷部からの侵攻に備えた障壁⁽²⁾との見解がだされている。筆者にはそうした視点が欠けているが、卓見と思われる。

こうした見解に対し、鬼ノ城創築期のものとしては石材の風化が進んでいないのではないか、という意見もあるのでふれておきたい。たしかに石材の中には風化の進んでいない稜線の明瞭なものがあったり、積み直しや補強したらしいものもある。後者については砂防工事の際に手が加えられた可能性が高いようである。風化については、ここ十数年の調査で露出している他の遺構にも同様のものがある。風化の進行については、むしろ石材質の硬軟が影響しているのではないかと考えている。

(5) 城内の遺構

門道部の奥には、地山をL字状に掘り込んだ柵形状の遺構がある。現状で長辺の長さ13m、短辺の長さ6m、高さは最高部で1.5mほどである。掘り込みの角度は60度くらいである。掘り込みの上面に柵列か板扉を想定して柱穴をさがしたが、存在しなかった。城門防備のための施設であろう。

柵形状遺構の右横に素掘りの溝がある。現状の長さ17m、底幅3m、深さ45cmで下部に20cmほどの段差がある。この溝は右斜後方にある城内で二番目の高所（標高374m）斜面からの流水をうけ、第4水門のある谷に排出するための溝である。この溝によって門道部の排水溝への流水量を減水するためと考えられる。柵形状遺構の上面は第4水門側へ下降しており、排水溝へ流入する推量はかなり減水されていると思われる。この他には土壌が溝の周辺で検出された。



第78図 城内の溝 平・断面図 (S=1/150)



第64図版 城内の溝 (南東から)

1. 暗灰黄色土、淡黄色ブロック少含
2. 暗灰黄色土、淡黄色
3. 灰黄色土、少含、礫土・炭粒混
4. 黄灰色土、少含、礫土・炭粒混
5. 灰黄色土、少含、礫土・炭粒混
6. 淡黄色土、淡黄色

以上を要約すると

- ・北門跡は背面側の小さな谷部の谷頭となる味方折れの区間に位置している。背面側唯一の城門であり、所在位置からみて搦手門的な城門である。
- ・城門周辺の城壁幅は10～10.5mで、右側城壁の外側は門道部に接する部分の下部は石垣積みになるのに対し、左側では一部の調査であるが列石を置かず、地山上から版築土塁を積み上げている。城内側も下部は石垣積みになっている。城壁の高さは5.5m以上になる。
- ・城門は間口1間（400cm）、奥行2間（638cm）または3間（965cm）の掘立柱城門で、本柱は一辺最大55cmの角柱だが、他の柱は径30～40cmの丸柱という組み合わせである。
- ・門道部床面は他の城門と同じ大型材の石敷だが、奥の柱1間分は小型の石材を敷石状に敷いている。
- ・床面のほぼ中央部に排水溝が付設されている。溝は奥側は明渠溝、前側は暗渠溝である。
- ・門道部の壁面は、奥1間分とそれより城内側へかけて石垣積みとし、他の柱間は板壁と推定される。
- ・門道部の前面は石垣積みで造設するが、その天端と門道部床面には1.7mほどの段差となる。この段差は東門や南門に比べると多少低いが、やはり懸門的な城門となろうか。
- ・石垣は左斜面の城外にもあり、位置や構築技法からみて城門と一体的に構築されたと想定される。
- ・城外側敷石は右側では一部残存しているが、左側ではみあたらない。
- ・門道部の奥には桁形状の掘り込みがあり、また城門への流水の減水を意図したらしい溝がある。

最後に城門の構築について、確認できたことについてふれておきたい。

<城門の構築順序> 北門跡は一部に盗掘をうけて破損したり、門道部の前端が雨水等により流失しているとはいえ、残存状態は比較的良好であった。保存公開等を考慮し、調査がやや不十分な面もあったことはいなめないが、判明したいくつかのことについて報告しておきたい。

◇地取選地や縄張り等については省略する。

◇城門部と周辺の城塁線一帯の掘削、造成、整地

◇城門部よりも周辺の城塁部が先行して築成されている。

・このことは城門の門道部両脇で検出された掘り方の存在から窺うことができる。ただこの時、城門部はほとんど手つかずなのか、それとも基礎部は城塁部と一体的に造成されるのか。これに関する調査はできていないが、門道部前面の石垣の存在からみて一体的に行われたと考えたほうが良さそうである。この時石垣Aのみなのか、後築でも可能だが石垣Bも含むのか。

・周辺の城塁部は土塁中の柱も立てられており、右側城塁の外側・背面の石垣は当然のことながら構築されている。門道部両脇の掘形ラインをすべて検出したわけではないが、さらに城内側へのびる可能性が高く、城壁部はほとんど完成近い状態まで進行していたと思われる。城壁部が先行して構築されているということは、城門部の構築にあたってその場を活用できる利点がある。

◇城門部の構築

・城門両脇の門道部となる土塁部分の掘り下げ。この時門道部の基礎部の一部、または全部が先行的に造成されていると思われる。

・門柱用の柱穴を掘り、柱立て。

・門道部床面までの造成。造成の途次に暗渠溝掘削、設置。明渠部分も一体的に構築したと考えられる。

- ・ 門道部に大型石材による石敷
- ・ 門道部奥側および壁面の石垣構築。柱間の板壁も同時施工か。
- ・ 門道部奥側の床面の敷石敷設
- ・ 上屋架構

以上がおおまかな城門構築の工程と推定される。しかしこれらを証するすべての調査を行っているわけではないので、その順序が逆になるものもあるであろう。

城門部をつくるための土塁掘削範囲が、門道部が収まるぎりぎりの範囲で行われているのは工法上合理的であり、また土塁が先行して築かれ、それを必要最小限度の範囲で切っているのは、空間の多い城門への土圧軽減を考慮したものと思われる。

- 註 1. 岡田 博「城内施設の解明へ!」『所報吉備』第28号 岡山県古代吉備文化センター 2000年
2. 向井一雄「城門」『古代山城の城壁及び付帯施設の再検討』第27回古代山城研究会

第Ⅳ章 平成14年度（2002）城壁線不明箇所の確認調査

1. 調査の経緯

平成13年10月11日に開催された第14回鬼城山整備委員会により平成14年度の発掘調査の方針が決定された。鬼ノ城の土地所有区分のうち城内が県有地であるため史跡整備の手続上、管理団体の指定を岡山県から総社市に移行するまでに期間がかかることや、史跡整備地域における保安林解除の申請・実施手続きが長期にわたるため、その間に城壁線の不明箇所を追求する旨の指導を受けた。

これは昭和53年の鬼城山学術調査委員会による踏査時に、鬼ノ城の北ないし東側、すなわち角楼から東門までの城壁線が不明であるため、今後史跡整備を実施していく上で改めて調査が必要と認識されたからである。

そのため第1期整備工事である平成13年度整備事業が終息に向いつつある平成14年3月に、予備調査として城壁線の踏査を行い、確認調査の候補地を選定した。踏査は基本的に鬼城山学術委員会の調査で明らかになった畧状遺構・列石等の所在する箇所や、現状において城壁線が周知されている箇所を除き、これら以外の不明箇所を探索することにした。

その結果、第110畧状区間（T3）、第94・95畧状区間（T27）、第87畧状区間、第77畧状区間（T15・16）において外側列石の一部を確認した。また、傾斜変換線から斜面下の地形観察に基づき、以下の知見が得られたので、これを基にトレンチの候補地を絞った。

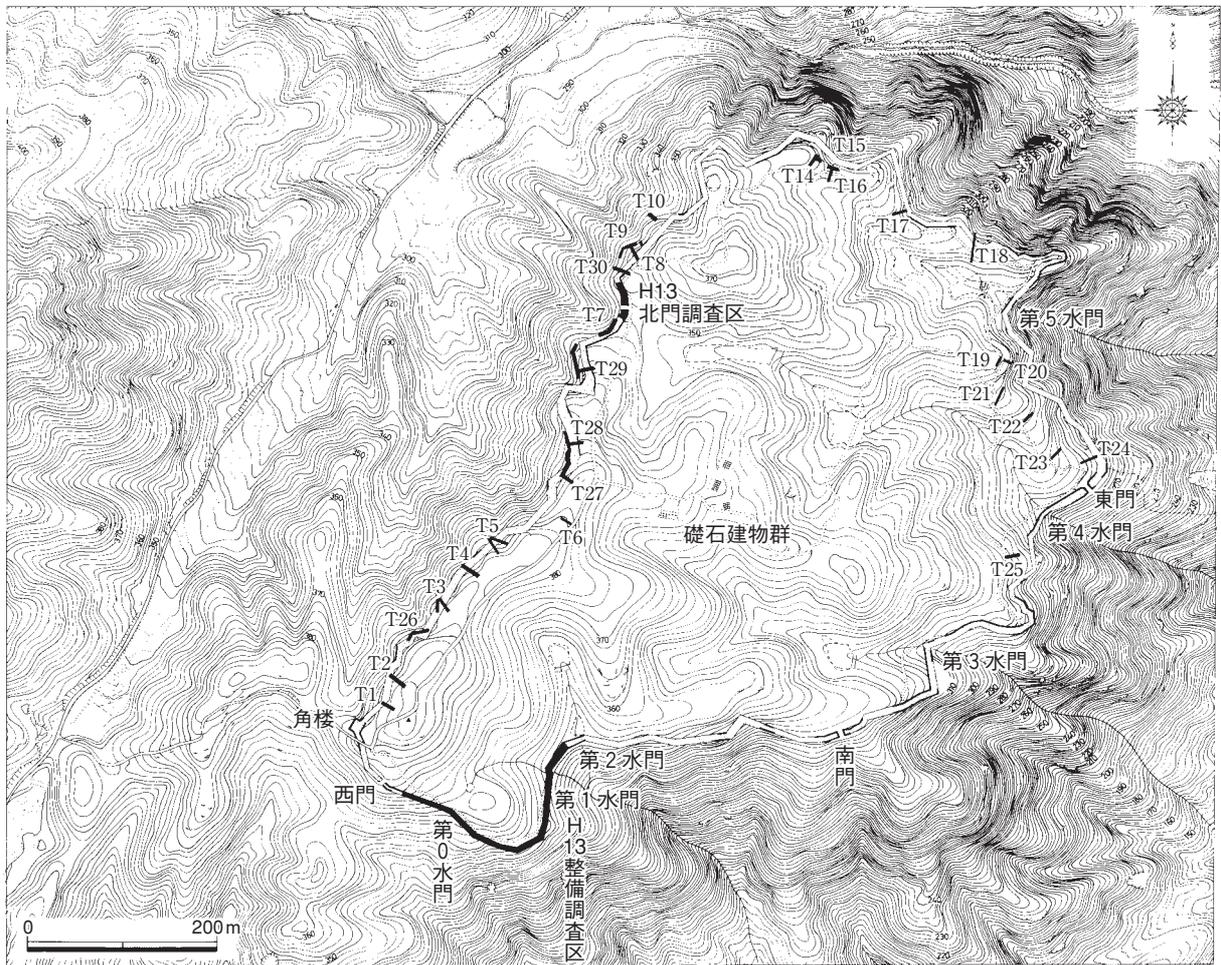
1. 城壁推定線には城壁の崩壊、版築盛土の流出後に、明治以降の治山事業である砂防段が幾つも形成され、すでに地形の改変が行われていること。
2. 砂防段は斜面の上下位置になるように段形成されているが、横方向には必ずしも一律に連続するものでなく、砂防段の「切れ目」が認められるので、この「切れ目」には改変前の地形が残存している可能性があること。
3. 傾斜変換線では地形の状況により谷頭が形成され、谷を遮断して土砂の流出を防護するための砂防石垣が構築されている一方で、斜面には瘤状に地形が張り出した箇所もあり、版築土塁の残存が期待できること。

以上の三点を参考としつつ、特に2の「切れ目」に遺構が残存している可能性と、3の瘤状の地形

が版築盛土の残存を示す可能性があること。そしてさらに露出している外側列石線の延長を勘案してトレンチを設定することにした。

トレンチは角楼から第45壘状区間（時計回り）までに26本設定した。なお、トレンチの候補地を選定中、事前に植生調査を総社市環境課に依頼した結果、北門から旧第2城門間に設定したT10からT13にかけてベニドウダンが群生していることが判明した。この部分について調査が実施できるよう協議を行ったが、群生が顕著であり春季においては移植が困難なことなどの理由からT10の規模を縮小し、T11～13の設定を見合わせ代替地を調査するよう方針を変更した。そのため、毎年下草刈り清掃を実施している城壁部分もしくは、周知の箇所にT27～30のトレンチを4本追加し、城壁の内部構造を確認することにした。

なお、発掘調査では外側柱穴のように造成土で被覆されている遺構は、保存のために最小限の検出に留めている。



第79図 調査地全体図 (S=1/8000)